

# スーパーウーマンじゃない私



## 寺田佳世

京都大学大学院工学研究科材料化学専攻  
[615-8510] 京都市西京区京都大学桂  
特定研究員, 博士(工学).  
専門は高分子合成, 機能性ペプチド.  
teradakayo.4w@kyoto-u.ac.jp

いま私はワークライフバランス的窮地の真っただ中。4歳と2歳の育児に追われながら、研究者としてのキャリアは崖っぷち。本欄執筆の依頼をいただいたとき、そんな私から「先輩からのメッセージ」なんて何が言えるのかと考え込んでしまいました。しかし、諸先輩方からの経験談やアドバイスを糧にここまで何とかやってきたことを思い出し、年齢だけは先輩っぽくなってきた私の、いま感じていることを書き記すことにしました。育児と仕事の両立に悩みつつ踏ん張ろうとしている私の経験が、どなたかのお役に立てるようでしたら幸いです。

### 私のいま

私は二人の子どもと、同業者の夫とともに暮らしています。上の子が2歳になるまで、夫とは別に暮らしていました。第二子妊娠中は、悪阻と第一子イヤイヤ期のお相手が非常に辛く、夫には片道4時間の距離を何往復もしてもらいました。一日を乗り切るのが精いっぱいの中、一週間分の家事と子どもの相手をして始発で帰る夫の背中に向かって、何度手を合わせたことか分かりません。しかし、それも夫の職場の方々のご理解とご協力あってのこと。今後への不安が大きく膨らんでいました。そんな中、現在お世話になっている沼田圭司先生に、夫婦二人揃って拾っていただけることになり、家族揃っての同居生活が始まりました。その2年後、夫の異動により再び別居生活を覚悟しましたが、またしても沼田先生のおかげで、今も家族4人一緒に暮らすことができています。

このような恵まれた環境にもかかわらず、私は育児に日々悩んで疲弊し、仕事も最低限のことすら達成できず忸怩たる思いを抱えています。今が一番大変な時期だからめげずに頑張る！と声を掛けていただくこともあります。子どもたちに負担を掛けてまで続けているのだから弱気になることもしばしばです。また、妻として夫を支えるべきなのでは？という、私のどこにそんな感情が眠っていたんだと驚いてしまうような古風な考えが浮かんでくることもあります。

私の母は、育休を取らず復帰した熱血系の“ワーママ”でした。当時周りにフルで働くお母さんは少なかったため、幼稚園の送り迎えがお母さんじゃないことや

家に帰ってお母さんがいないことの寂しさよりも、私にとってはそんな「かっこいいお母さん」が誇りでした。子どもの頃から憧れていた職業に就いた母は、全力で働き、全力で家事や介護をこなしていました。そんな姿を見て育った私は、知らず知らずのうちに作り上げた「ワーママ」とはかくあるべし」という理想像に支えられ、同時に囚われていたのかもかもしれません。

### ロールモデルと私

子どもが小さい頃のお給料はすべてシッター代に消えた、夫と別居のまま育児と研究を両立させた、朝は3時に起きて仕事をしている。このようなスーパーウーマンたる諸先輩方の経験談を聞くにつけ、その覚悟と熱意に圧倒されつつも、自分もそうありたいと強く思っていました。出産を控えてもなお、別居なんて何のその、育児と仕事の両立やってみよう！と勢い込んでいた私。産休中のテレワークを円滑に進められるように環境を整えて、出産に挑みました。しかし産後、身体中が痛みに悲鳴を上げる中、メンタルもフィジカルもホルモンの奴隷。頭が働かないので仕事はままならず、話には聞いていたものの焦りだけが募りました。ロールモデルに倣い効率よく家事育児を進めようとするも、誤算がありました。私自身に、時間を掛けた育児を試みたいという、仕事時間の確保と矛盾する思いが芽生えたことです。ワークに重きを置いた考え方ができないのは、研究者としての覚悟が足りない気がして気後れしそうになりますが、私には私のバランスがあると、最近では開き直すようにしています。私は母ではないし、これまでのロールモデルとも違う。学生の頃憧れたスーパーウーマンたちとは違うけれど、ワークもライフも私なりに妥協せず、貪欲に向き合っていきたいと思っています。

最近家で仕事をしていると、4歳が「お仕事頑張ってるね」と言ってくれるようになりました。2歳も真似して「ママ、おしごと？」と聞いてきます。子どもたちが私に向ける信頼の目。これに応えたい、かつての私のようにお母さんはかっこよかったと記憶に残してほしい。これが今の目標です。周囲の支えに感謝しながら、目の前の課題に一つずつ取り組んでいきたいと思っています。